
再掲：闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再掲：闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

【Nコード】

N0311BA

【作者名】

pand i 剛種

【あらすじ】

あらすじ：探偵水樹幸一は、大島由々子という女性から依頼を受ける。それは自分の故郷について調べて村で行われている儀式を止めろということらしい。村に入れば待っていたのは少女とのエッチと多くの人間の死、そして『異人』と呼ばれるもの達、そして『六の獣』と暗き者。水樹幸一は様々な困難を乗り越えつつ、土着の神の復活を以て暗き者達に立ち向かおうとする。

「神を復活させる、例え何を犠牲にしても、どんなことをしても、必ず」

一話目

七月の七日に二人が死ぬ。

八月の三十日に一人が死んで、神がその腕を広げる。

九月の一日に一人が死んで、最後の一人は薪にくべられる。

拾月の十日は神をたたえる日。数が足りないので新たに一人の人が死んで最初の一人が目覚めます。

十一月はたくさん殺そう。特に二十日がいい。腐った七人を薪にくべ、炎は暗闇に燃え上がる。

たくさん殺した、たくさん殺した。

そして拾二を数えた月の日に花が芽吹き、新たな神が姿を現す。

不気味だった。

探偵をする私の前にやってきた女性は、事務所に入ってくるなりそわそわとした様子でコーヒーターブルに紙を差し出した。

レインコートと濡れた長い黒髪で顔は見えない。

わかるのは、息が少し荒いと言う事。

焦っている、というよりはなんだか興奮している。

カチリ……カチリ……

彼女の胸元のあたりから聞こえてくる時計の針の音。

時折胸ポケットから取り出す金色の懐中時計を確認しているように、何かよほど急いでいるのだろうか。

コーヒークップを片手に持っていた私の動きが止まり、視線は紙に釘づけになる。

「……なんでしょうこれ」

紙には上記の事が書かれていて、何やら謎めいているというのが率直な感想。

文字は丁寧な紅いインクを使った筆文字。
顔を近づけ匂えば、微かに漂う鉄の匂い。

「……あなたの血ですか？」

女性は俯いたまま、僅かに首を振るだけで向かいのソファで身体を僅かに震わせる。

「二、三尋ねて良いですか？」

「……はい」

震えた声は、不安に満ちている。

この女性は今のところ、嘘をついている様子はないと感じる。

「一つ。あなたのお名前と住所をお教えしてほしいのですが」

「大島由々子……と申します。住所は……ありません」

「住所不定ですか」

「は、はい……」

不況が続く日本ではそう珍しいことではない。

まあ興味もあることなので、私は質問を続けてみる事にした。

「もうひとつ。これがどこから届いたものかわかりますか？」

「……」

答えたくなさそうに大島由々子は首を左右に振る。

言いたくない、なぜ？。

「……最後に一つだけ聞きます。あなたの依頼はなんですか？」

「……お願いが……あります」

「はい」

「その手紙は、私の故郷から送られてきたものなのです……」

「はあ」

「死んだ父の名前を使って、取り壊したはずの家の住所から来ているのです」

言ってるじゃないですか。

先程と変わって、焦燥しつつも、すらすらと話し始める様子に、私は戸惑いを覚えつつ、手に持った紙を覗きこむ。

「そこには五人の男が死ぬと書いてあります。もしかしたら私がふ

くまれているのかもしれないのです」

「……由々子さん男じゃないですよね」

「間違えました、男女限らずなんです」

十一月以降の動向が少し不明だが、概ね五、六人が死ぬことを予告している事になる。

壁に引つけたカレンダーを見れば、今日は雨降る六月。

死人が出るのは来月、か。

「この手紙の文章。内容等々で見覚えはありませんか？ ただの脅迫文にしては妙に凝っていますね」

「……故郷では、神殺しの儀が毎年七月に行われるのです」

「物騒……」

「その文章で、我々村の一族が殺す神様が語る言葉です……おそろくソレにもじって誰かが私を殺そうとしているんです」

「……由々子さんご本人の指定はありませんが」

「……。私の一族は、毎年神に生贄に出されていた一族なのです……」

一族から排出される生贄は、男女。

あまり民俗学は明るい方ではないのだが、私のイメージでは生贄って大概女性のみが差しだされるのではなからうか。

生贄は、あまり本気でやる慣習はそうそうない。

食いぶちを減らすために働き手になりづらい女の子の余りを殺すための口実を作るにすぎない、と私は思っている。

ただ彼女の所はそうではなく、頭のおかしい輩も大勢いるということ。

それだけ土着の信仰が、彼女に重くのしかかっている。

胸の内がぐるぐるといやな感情で渦巻いていた。自然と顔も引きつって、私は笑顔に戻して大島由々子に尋ねた。

「すいません。話を続けましょう」

「はい……探偵さんに頼みたい事は二つあるんです……」

「うん、続けてください」

「一つは、村で何が起きているか調べてほしいのです。……私が行けば、おそらく生贄にされるかもしれません」

本当にされるんだろうか。

この日本に住んでいて、変死はともかく生贄にされて殺されましてなんて人はニュースでは聞いたことも見た事もない。

「もうひとつは？」

「村の人たちを……殺してほしいんです」

私はさすがに顔を引きつらせながら、小さく首を振ると、真剣な表情で私を見つめる大島由々子に告げた。

「残念ながら、人殺しはご法度なのでできません。ですが何らかの方法で村の儀式を止めればよろしいんですね」

「……。はい……」

「私はしがない探偵なので、大したことはできません。正直なところ、警察に駆け込んだ方がいいのですが」

「……」

「この文章じゃ、そもいきませんね」

そう言って、私は手に持っていた血文字の紙を折りたたんでテーブルの上に置くと大島由々子の顔を覗きこんだ。

「持っておきますか？」

「いえ……」

「では私の方で預からせていただきますね。事が済めば処分させていただきますので」

「よろしく……お願いします」

「はい。では大島さんの住所を教えてほしいのですが」
差し出したのは別の紙とペン。

コクリと頷くままに、大島由々子はさらさら住所を書いて、私の下に差し出し、私はその紙の中を覗きこむ。

長野県の奥地。くわしくは知らないがその山間の地区らしかった。知らない場所だなあ

「お願いします……村の人を……止めてください」

「あ、はい……出来る限りは。後ソレにあたっては村の伝承等も少し教えていただけると」

「……『六の獣』……深き闇」

「え？」

「……。なんでも、ありません」

何か言いかけて途端に口を噤む大島由々子。

私は奇妙に思いつつも深く突っ込むことはせず、小さく頭を下げるままに立ちあがってコーヒーを入れることにした。

「報酬の件はどうします？そちらさんの都合で後払いでもよろしいですが」

「……いえ。先に払わせていただきます」

払う金はあるんだ。

多少予想が外れて私は驚きを隠しつつも、コーヒークップを二つ左右に持ちながらソファーに座った。

鞆をまさぐる彼女の様子を伺いつつ、私は紙コップを差し出す。

と、取り出したのは、紙きれ一枚で

「小切手よろしいでしょうか……」

「まじ……？」

私が頷く前から、女性はさらさらと小さな紙に自分の名前と、金額をペンで明記し私に小切手を突き出した。

二億円。

さすがに桁数には、目を剥かざるを得なかった。

「……お願いします」

「あ、ちよつと……せめて連絡先を」

引きとめる私も半ばに、大島由々子はそそくさと事務所を後にしていなくなってしまった。

私のペンを持ったまま

私はというところばかんとして、二億の小切手を握りしめていた。

これ、どうしよう。

手に入れた事もない大金に戸惑いつつ、私は残ったコーヒーを浴

びることにした。

頭が少し冷える。

私は小切手をテーブルに置き、畳んだ『脅迫文』を手に取り再度中を覗きこむことにした。

描かれた血文字が私に目入る。

微かに血の匂いを感じさせるほどに、まだ新しさを残している。

どんな人が書いたのだろうか。

丁寧な文字列から感じられるいくつかの事柄を頭の中に巡らせ何度も巡らせ

「ていうか……これ脅迫文？」

大島という素性も知らず、なぜ彼女が殺されるのかという因果性もどうも見受けられない。

彼女の素性を調べた方がいいのだろうか。

彼女の故郷に一度乗りこんだ方が良さいのだろうか。

それとも

「……行くか」

私は彼女がくれた小切手を手に握りしめ立ち上がった。

ジワリと熱を持つ小切手。

手の中の熱っぽい感覚に、私は眉をひそめながらも、部屋の隅のコートに手を伸ばした。

トレンチコートはお気に入り、量販店で買った茶色。

初夏の蒸し暑さに負けないように、腕をまくりかっこよく鏡の前で決めて、私は最後に帽子をかぶる。

「うんっ、格好いい」

手に持った小切手を胸ポケットにしまいながら零れる笑顔。襟元を整えながら、私は窓の方へと振り返ろうとする

ビタビタビタッ……

聞こえてくる、濡れた肉の叩きつけるような音。

窓から聞こえる、ぼそぼそと、何人かが互いに囁き合うような、とても小さな声。

誰かいる

「……」

眉をひそめ、窓のカーテンを開くと、そこには視界を覆う程、びつしりと手形の様な跡が浮かんでいた。

蛙の様な手の形は、泥をつけて窓を這いあがったのか、土気色に汚れている。

二階のビルの窓が黒い土の手形にまみれている。

（ ）

事務所の入り口から聞こえてくる囁き声。

小さな、耳を澄ましてもわからないほどの細い声に、私は目を細めグッと帽子を目深にかぶってカーテンを閉めた。

そして、事務所の入り口の扉を開いた。

左右に広がる薄暗い廊下。

チカチカと切れかけた電灯が足元を照らし、窓一つない廊下に私の影が映し出される。

「……」

足元を見下ろせば、そこにはグッシヨリと雨粒に濡れて色を変えた床。

ずっと誰かが扉の前に立っていたようだった。

「……」

黒ずんだ水の軌跡は、薄暗い廊下の向こうまで伸びていき、粘りつくような暗闇の中で途切れている。

（……何かが追ってきている）

背中を感じる、僅かな視線。

ねっとり絡みつく気配は、絶えず複数で私の身体を舐めまわす様に見ているように感じる。

これが大島由々子の感じる『恐怖』

この向こうに、怪しげな儀式がある

「……」

私は部屋の電気を全て消すと、探偵事務所の扉から廊下へと一歩

を踏み出した。

雨の中に混じってノイズの様な囁きが聞こえる。それは耳元を掠め、私はノイズに眉をひそめながらも扉に鍵を掛けた。

私はコートの中に突っ込んでいた手帳を取り出してペンを走らせる。

『儀式について』

『彼女の故郷に関して』

二頁に分けて項目を作ると、私は手帳にペンを挟んで胸の内に手帳を挟じりこんだ。

まずは大島由々子さんの近辺を調べてみないと。

私、水樹幸一は今日、二か月ぶりの探偵稼業に胸を膨らませながら、事務所から一步を踏み出した。

外を見れば雨、しかしながら空は晴れている。

もうすぐ、雨が上がりそうだ。

二話目

驚いた事があった。

それは大島由々子は私が尋ねる数日前に、既に自宅から居なくなっていたという事だった。

夫からの搜索願が出ていたようで、彼女の近辺を調べていた私はおかげで数日程、警察に拘束された。

私は彼女から依頼を受けているだけなので、事情聴取という言う名の取り調べを経て失踪に関して疑いは晴れた。

夫からは、報奨金の一億を返してくれとしがみつかれた。

ただ小切手を受け取った以上、依頼を最後までやり遂げたいし、途中でやめる事なんて許されるわけでもなかった。

「訴えてやる、弁護士はいくらでも用意できるんだ、刑事訴訟も含めて覚悟しておけよ！」

なぜそこまで拘るのか、敢えて問う気もなかった。大凡親族遺産と言ったところなのだろう。

出資元、か。

古今東西より伝わる言葉の中でも、因果応報、人を呪わば穴二つという言葉はとても説得力があり、また魅力的である。

何かを得た結果の相応の代価は、既に払われているという事になる。

大島由々子は何かを得た。その結果、脅迫文を送られることになったのだろうか。

それともその家系が何か関係あるのだろうか。

神への生贄。贖罪、人の罪　　呪い。

「そして人の業　　」

私は、一刻も大島由々子の事について調べることにした。

その為には、大島由々子の実家、或いはその近辺を調べる必要がある。

その為に、ある男を尾行しないと

時間は午前十一時三十五分。

雨にあたりながら、我々は大島由々子失踪の件についての容疑者と思しき男を追いかけていた。

私の名前は島崎昇。部下の田島浩二を引きつれながら、雨の中ひたすらに男の背中を尾行している。

身長は田島を抜かすであろう程の比較的高身長。私も抜かれるくらいは大きいくらいだろうか。

男は今、大島一家の家屋に面した道路の隅、電柱に隠れているようだ。

おかしい。

彼は確か三日前の聴取には、彼女の家は知らないと答えていた。

大方、夫の尾行でもしたのだろう。

顔は柔らかな好青年の様相を呈しているが、よくやるものと感心する。

まあ、人間は得して何を考えているのか分からない。

身なりは薄汚れたトレンチコートに身を包み、顔を帽子と襟で隠しながら、今もなおその男はじっと大島邸を見上げている。

何かを観察するように時々メモを取り、周囲を見渡す。

時々、こちらに視線を送っては、苦笑いを浮かべている

「……気づいてやがる」

呟く小声が、嵐の様な大雨の中に消えていく。

今にも雨に押しつぶされそうな折り畳み傘を分厚い雨雲にかざしながら、私は更に電柱に身を寄せる。

それに合わせ田島も身を隠し、電柱の陰から奴を見つめる。

「あいつ……何を探ってるんでしょうね」

「ごっこだよ……」

そう呟く声すら、激しい雨脚の中に掻き消えていき、傘が重く感じるほどに雨は重たさを増していく。

と、雨の音の中、妙に響く足音と共に、コートを翻して男が大島家から離れた。

そのまま別の民家の所に足を運ぶ姿に、私たちは顔を見合わせる
と、急いで彼の後ろをついて歩き出した。

目を覆う程の雨粒の向こう、男は一つの家の前に足を止めた。

我々も電柱の前で身を隠そうと急いで足を止める。

「……ん？」

パシャパシャパシャッ

不意に聞こえてくる、後ろから走ってくるような足音。

どんとどんと迫ってきている。

私の耳元まで聞こえてくる

「……？」

妙に思っ、後ろを振り返ると、そこには部下の田島が同じように電柱の裏に隠れていた。

「……遅いぞ、ちゃんと付いてこい」

おそらく遅れて着いてきたのだろうと思い、私は小さな声で部下を叱咤した。

部下は少し不思議そうな声で小さく首を振る。

「い、いえ。僕はちゃんと後ろにいましたよ」

「……」

田島の後ろには道路の視界を奪う程の雨のカーテンが広がり、その中には人影が一つも見えない。

誰もいない。

あるのは灰色の景色のみ。

聞き間違いと思い、私は「すまない」と田島に頭を下げると、再び男の方へと目を向けた。

「ありがとうございます」

男は民家の玄関の前で頭を下げて民家の玄関前を離れていき、私は距離を置いて、同じようにその民家へと足を運んだ。

パシャパシャ

足音が激しい雨の中に響いている。

耳障りなくらいに

「すいませんっ」

家に入ろうとする家主を引きとめようとしながら、まだ耳元で水を跳ねる足音が聞こえてくる。

今度は一つではなく、二つ、そして三つに増えていく。

足音が耳元まで近づいてくる

「あら、あなたは？」

そう言って家に戻ろうとしていた家主の女性が振り返ると共に、足音はピタリと止む。

耳障りがなくなり、私はホッと一息つくと、警察手帳を片手にかざし、女性に尋ねる事にした。

「二、三簡単なことをお聞きしてよろしいですか？」

「あ、はい……」

戸惑いながら、女性は私の言葉に頷く。

「先ほど、ここにコート姿の青年が来ましたね。彼は何かを尋ねて行きましたか？」

「ええ。いつ頃から大島さんの奥さんが見えなくなっただけで聞いてきましたわ」

「他には？」

「大島さんの奥さんが普段どんな方かと聞いてきたり、相談や悩みを受けたことがなかったかと聞いてきたわ。」

先ほどの人の話だと、会った時は随分と落ち込んでいたと話していましたし」

夫から大体の情報は得ている。

普段からおとなしい人柄で、あまり周りに相談を持ちかけたりはしない性格のようだった。

「そうですか。他には？」

「うーん……このあたりで何か変わった事がないかとか、何年前に大島さん一家がここに来たかって聞いていましたね」

ここら辺の治安状況？

聞いてどうする。彼が大島由々子を殺したのではないという事を我々に証明しているというのだろうか。

だがあの男がこの質問を以って自分の無罪を証明しようとしてる様子ではない。

単純に聞いている 何のために。

「……このあたりで、何かおかしいことなどはありましたか？」

私は疑問符を頭に浮かべつつも、水樹幸一がした同じ質問を尋ねてみると、女は先ほどより歯切れのいい言葉を返す。

「いいえ。ここらへんで事件なんてありませんわ。平和なものです」

「うーん……そうですか」

「ただ、妙な事があります」

「？」

少し暗い表情になり、奥さんはややあつて躊躇いがちに告げた。

「自治会でも話している所なのですが、最近、冷蔵庫などの食べ物は齧られていると言う事が、どの家庭でもあるのです」

「……。ねずみ、ですか？」

「この街の下には、古い地下道がその裏山まで伸びていて、そこから野生の動物が出てきているのではないかと、皆は言っているんです」

ばかばかしいと思えば思う程に力が全身から抜け、聞いているのだるくなり、私は傘を持つ手が重たくなるのを感じる。

それとは反比例して雨はどんどん強くなっていき、私の身体にのしかかる。

「ただ、皆一様に言うのは、齧られた野菜やソーセージの歯型は全て人のものに酷似しているんです」

目の前の景色すら霞むほどに　分厚い水のカーテンが私の視界を遮る。

パシャパシャ

いくつもの人間の足音が聞こえる。

「中には綺麗に袋から取り出して食べきっているものもあって、それが半月に一度、どこかの家に置きかえられます」

女の姿がぼやける。

「それはそれは……とても綺麗に」

まるでマネキンのように唾つ口元に凹凸がなくなる

「それくらいですかね。警察の方にもこの事は頼んであるのですが」

「……ご協力ありがとうございました。我々は引き続き捜査にあたりますので」

奥さんは頭を下げるのを見て、私は背を向け警察手帳を取り出した。

びつしりと十年間書きこんだページに新たな落書きが書きこまれる。

私はペンをさらさらと動かすと、顔を上げ、部下の田島を呼び寄せようとした。

「おいっ、田島」

雨の音が途絶える。

途端に道路に静けさが広がり、どんよりとした雲の下、雨が上がる。

ピチャピチャと電線から雨が滴り広がる水たまりを叩く。

手から100円で買った傘が水たまりにすり落ちて、水しぶきが跳ねる音が閑静過ぎる住宅街に響く。

人気はなく、あるのは街の景色と電柱の立ち並ぶ道路の景色だけ。

誰もいない

「……田島？」

ザアアア……

微かに水の流れ落ちる音が聞こえる。

ふと遠くを見れば、道路の端に開いたマンホールが見えて、雨水がどんとと地下水道へと流れていた。

薄暗い闇がマンホールの奥に続く。

覗けば、吸い込まれるほどに

「……」

おそらく帰ったのだろう。

あのバカ、水に濡れるのが嫌だからって。

異様なほどに静かになった街中で、私は悪態をつくと踵を返した。とりあえず署に帰ろう。

私は警察署への帰路へと付くままに、足元に転がるビニール傘を拾い上げ、その場を後にした。

ゴボリ……

開いたマンホールから、何かが詰まるような音が聞こえた気がした。

気がしただけだった。

三話目

大島家の裏手にある裏山に上り、雑木林を抜け、見つけたのは小さな洞穴だった。

鬱蒼とした空間の中には、ゴミや空き缶が散らかり、人が入ったような形跡がいくつも見受けられる。

濡れた落ち葉を踏む音が薄暗い林の中に響く。

私はペンライトをかざし、中を覗こむ。

洞窟の高さは、おそらく人が少し屈んで通れるような場所。

光を投げ込んでも、奥に広がる闇を払えないところを見ると、中を相当曲がりくねって深い。

まるで、蛇のような形を彷彿とさせる。

そして鼻を突く、僅かな死臭。

蠅の一匹も飛んでいないところを見ると、綺麗に食べきっているのだらうと感心するがどこもおかしい所はないように思える。

ただ、この洞窟が存外にせまい事、そして空気が淀んでいる事が重なって、中の空気はゴミ処理場よりも深い瘴気に満ちていた。

私は帽子で口を押さえながら、ペンライトで中を照らしながら、ゆっくりと奥へと進んでいく。

重たい空気が身体を包み、意識が遠のくほどの狭さに、私は目を細める。

光を目の前に照らし、闇の奥へ進む

カラン……

程なく、微かに何かが足先にあたるような音が耳元で響き、私は視線を落とした。

暗闇に手を伸ばし、ペンライトを手元に近づけると、ソレは白い

塊だった。

中がしゃぶられ空洞になり、表面に肉片のこびりついた、骨。

「……」

ペンライトで周囲を照らすと、更に大量の骨がどっさりと目の前の行き止まりに積み上がっていた。

カラリと頭蓋骨が不意に転がり落ちる。

人の頭ほどの頭蓋の窪んだ眼が、暗闇に目を細める私の視界を覆う。

「……さて」

私はペンライトをかざしたまま、腰を落とすと、積み上がった骨塚の周囲を探す事にした。

欲しいものがいくつもあった。

そしてそれはここにあるな、という予感が私の中でぐるぐると渦巻いていた。

暗闇の中、まさぐっていた指に何かがあたる。

それは、骨の感触とは違うもの。

おおよそ毎日触ることになるであろう、プラスチックの感触。

私は唇を軽く噛むと、ペンライトを握る手に汗を滲ませつつ、恐る恐る手に取ったソレを光にかざした。

それは三日前、彼女が持っていたままの、私のペンだった。

「……すいません。遅れてしまって」

私は、ペンをポケットの中にねじりこむと、寂しさと悲しさを胸に抑え込みながら更に暗闇をまさぐった。

彼女はここにいる。

手を泥に浸しながら、私はペンライトを口にくわえ、骨の中に手を突っ込む。

（……あ）

ガサリと手に這う、濡れた紙の感触。

私は手を伸ばし、こびりついた骨片を払うと、ペンライトで自分が手に取ったものを照らした。

暗闇に浮かぶ濡れた紅。

私の手には、小さな手帳がそつと置かれていた。
表紙を開き中を覗きこめば、びっしりと白いページを黒く埋めん
ほどに書かれた文字の山。

その筆跡は大島由々子のもの。

「……行きましょう、一緒に」

私はそつとメモ帳を胸に強く抱きしめると、腰を上げるまに恐
る恐る踵を返し、暗闇を光で照らした。

うつすらと零れる入り口の光。

外が晴れた事を示し、私はホツとした面持ちでペンライトで周囲
の壁を照らしつつ洞窟を抜けだした。

「ふう……」

ポタポタと雨の残り露が私の首を掠め、鬱蒼とした雑木林にぼん
やりと霧がかかり始める。

空を見上げれば、日は傾いていて、夜が降りてくるのを感じる。
暗闇は足元から這いあがってきて、私はペンライトをポケットに
収めながら、僅かに感じる夜の匂いを鼻に吸いこんだ。

（……大島由々子さんは、死んだ……）

洞窟の傍に立てていた傘を取り、近くの木の根元に腰を落とすと、
私は胸に隠していたメモ帳を開いた。

暗闇が広がる中、視界も悪くなり、私はペンライトで中を照らす。
「……読めない」

それでも血と雨にぬれて、ページはどこもかしこもひつつき、文
字は殆ど滲んで見えなくなっていた。

無理に剥がそうとすれば、読めなくなりそうで、私は読めるペー
ジだけに目を通す。

五月、三十日。

書かれた最後のページの数行だけがかろうじて読める。

（ついにこの日が来た。まだ日が明るいですが私の最後の一日をこ
こに書きしるそうと思います。）

今日は娘の誕生日です。娘の為に夫と娘の三人で買い物に行きました。大好きなケーキを買い、色々なお店を回りました。買った物は食品に、プレゼントのおもちゃと大きなケーキです。

娘は笑っていました。それだけでよかったです。娘の笑顔を私の最後の贈り物とさせていただきます。

さよなら……)

その後にも、びっしりと文字が書かれているが、残りあまりに滲んでいて更に夜も降りてきてとあつては、読むのも辛い。

ただその分だけでも読み取れることはいくつかあった。

(……彼女は、自分の死を予期していた。受け入れているという事は、結構前から彼女は今年の、その日に死ぬことを宣告されていた) 癌や、不治の病の類ではない。外的要因によって殺されることが分かっていた。

(……あの文章は、彼女が言うには神が呟いた言葉らしい。それには儀式の一節だつて言っていた。

それに則つて殺された 彼女は巫女さんか何かだろうか)

私は村の外にまで影響を与える程の強い力に、僅かに身震いを覚えながら、メモ帳を閉じようとした。

(……ん)

視界の端に映るページの黒い染み。

空白だったページにうつすらと文字が浮かび上がり、私は驚いて慌ててペンライトで照らした。

そこにははつきりと日本語の文字が映し出されていた。

生きて、ください。

滲みだした文字は強く書かれていて、私の胸の内に強く刻まれた。「仕事は、きっちりこなしますよ、由々子さん……」

私はそつとメモ帳を閉じると、胸ポケットに収めるままにペンライトの明りを切り立ち上がった。

そして傘を片手にすっかり薄暗くなつた雑木林に向き合う。

(とりあえず、今からお師匠の所に行つて話を聞こう。それからで

も遅くはない)

ぎあああああああああああああああ！

薄暗い雑木林の向こう、遠くから聞こえてくる男の悲鳴。

誰かが襲われているのだろうと思いつつ、師匠のところに向かう事に私は胸を高鳴らせながら、暗闇を踏みしめた。

ズリズリと肉を引きずる音が雑木林の中に響き、何人かの人影が私の横をよぎる。

私を見ている。

事務所のある貸しビルのすぐ傍の路地。

誰も入らないくらいに薄暗くてどこに続いているのかすらわからない道がそこにはあった。

野良猫一匹すら通らず、あるのは積み上げられた生ごみの異臭と、地面に散らばる肉片のようなもの。

いずれも不快なものばかりで、近づく者は誰もいない。

そんな薄暗く、汚く、そして文字どおり臭い路地裏に、一軒の小さな家があった。

ビルとビルの間に挟まったその家は木造建て、人の出入りを遮る門扉は、人の丈を軽く超える頑丈な木の扉。

鬱蒼とした竹林と小さな砂利を敷き詰めた庭に囲われた木造の家は、一階建の小さなお店。

看板もないけど、人もいないそんな秘境が、私の師匠とその師匠である大婆様の住む家だった。

すごく近い場所にあるけど、大凡二年ぶりの帰郷。

私は巨大な門扉の前に軽く二度門を叩いて、声を潜ませる。

「失礼します」

地鳴りのような音を立てて開く門の向こうには、竹林に囲まれた小さな庭が広がり、私は石畳の通路を通り玄関の扉を叩く。

「大婆様、お師匠。いらつしやられますか？」

程なくして聞こえてくるのは、明るい老婆の声。

「おや。家出坊主が帰ってきたかい」

私が手を触れる前に玄関の扉は横に開き、土間が目の前に広がる。奥には今に繋がる廊下、そしてひょこりと黒い犬が廊下の奥から私を出迎えてくれた。

犬は嬉しそうにヒクリと耳を尖らせると、カツカツと木の床を鳴らして私の下へと駆け寄ってくる。

私は土間に片膝をつき、飛び込んでくる大きな犬を強く抱きしめた。

「幸一！ 久しいではないか！」

イケメンボイスなんて世間でもてはやされるであろう低い声を発する黒い犬に、私は思わず苦笑いを浮かべる。

「お久しぶりですお師匠……」

「ははっ、本当に。二年も外にでて何をしていたのだっ」

「あはは……近くで探偵事務所を開いていました。多分御師匠もごらんになっているはずですよ」

「ああ、水樹探偵事務所だろ！ いかにも流行らなさそうな名前して、客なんて来なかったらうにっ」

「ご明察です……」

「全く危うい仕事を受けていると言った顔だなあ、このバカ弟子がっ」

「お、大婆様に会う前にベトベトになりますっ」

女の子が聞けば鼻血が出るくらいの良い声に肩をすくめながら、私は頬を舐める師匠を引き剥がした。

師匠は寂しそうに耳を垂らしつつ、振り返って私に肛門を見せる。

「むう……まあいい。婆様が呼んでいるぞつ、早う来いっ」

「師匠。いつもその姿なんですな」

「スカートの中身が良く見えるからなつ」

自慢げに告げる犬の師匠は、ここを出て行った二年前と変わらず、私は懐かしい思いで靴を脱いだ。

そして師匠に連れられ、私は奥の茶室へと足を運ぶ。

襖の向こうには人影が、じっと正座しているのが見え、師匠は襖の前で声を張り上げた。

「婆様、幸一が見えたぞつ」

「……入りなさい、坊主」

懐かしい呼び名だった。

言われるままに私は床に正座をすると、ソツと襖を開き床に額が擦れるくらいに頭を下げた。

「……夜分遅くに失礼します、大婆様」

「懐かしいの、幸一」

皺を頬に浮かべニツコリと笑う柔和な表情。

簡素な髪飾りで髪を結び、藍の和服姿のよく似合う細身の体を囲炉裏の前に佇ませ、そこには銀髪の老婆が私を見下ろしていた。

「婆様。懐かしいだろうつ。二年ぶりだぞつ」

嬉しそうにそう言い、犬の姿をした師匠は老婆の前に座る。

私は顔を上げると、床に座ったまま滑るように茶室に入り、襖を閉め、優しい笑みを浮かべる老婆に向き合った。

注視する紅い瞳は変わらず、私を見透かしているようだった。

「えと……そのお久しぶりです。大婆様」

「ふふつ、積もる話をしに来たのではないのだろう」

「また、いずれさせてください」

「良い。顔を見られただけでも、私は満足している」

嬉しそうに顔を綻ばせ、老婆は膝に置いていた手をそつと上げ私の方へと差し出す。

私はコートの中から大島由々子の日記帳を取り出した。

そして老婆は渡されるままに、張り付いたページの一部を覗きこむ。

「……」

「なんじゃそれ？」

少し表情を強張らせる老婆の横から、お師匠は彼女の傍に寝転がり、前足の上に顔を乗せて欠伸を漏らす。

老婆の目は少しだけ険しくなった。

「幸一。少し難しいものを貰ったようじゃの。……いやな手相を見ているようじゃよ」

大婆様は種類の占いを扱う占い師や霊媒師だった。ネットでもそう言った物を立ち上げているようで、収入も上々だった。

あくまで、表向きではあるけども

「……少し見てみようかの」

そう言つて、大婆様はページの切れはしの白紙をちぎると、囲炉裏の燐りの中へと投げ込んだ。

立ち上る炎。

舞い散る黒い吹雪。

まるで龍の如く瞬時に囲炉裏の中から這い出し、首をもたげてどす黒く燃え上がった。

炎の龍は恨めしげに老婆と、そして私を見下ろしている

「でかい呪いじゃ……」

しぼんでいく黒い炎。

フツと息を吹きかけるだけ、老婆の前に龍は形を失い、囲炉裏の中へとシュルリと消えていく。

黒い煙だけが微かに立ち上る

「深くは言えんが……暗き者達の末裔じゃの」

「……。大島由々子さんは『神』であり、儀式の言葉の通りに殺されると言いました」

「然り。神を名乗る者たちじゃろ。しかし人から拒絶された神は、本来存在を許されんはずじゃ。」

暗き者は神の中におるか」

「？」

私が首を傾げていると、御師匠は目を閉じたままこう言った。

「婆様は大したこと言つとらん。まだその『神』を崇めている連中がいると言つ事じゃ」

「……」

「だが、婆様の見立てでは、既に『神』は別の何かに乗っ取られているだかの」

「暗き者……」

「うすら寒い連中だ。こつちを見てニヤニヤ笑つておる……」

少しお師匠はいらいらしているようで、ムスツと顔をしかめたまま惚ける私から顔を背けた。

大婆様はそんな師匠を見て、困ったような笑みを浮かべ、そつと頭を撫でて、尖った耳の根元を爪で搔いてあげている。

そして、澄んだ蒼い瞳で私を見つめる

「……神は、自然の体現者じゃ。その神を乗っ取ったという事は、その土地は既に奴らのテリトリー。行けば、必ず呪いの形そのものに、お前を殺すだろう」

「……」

「他にもあるじゃろ。見せてみなさい」

ほっそりとした指を差しだされるままに、私は胸ポケットに収めていた、大島由々子の『脅迫文』を取り出した。

差し出すままに、私は四つ折りにした紙を開く大婆様を見つめる。

ほんのりと綻ぶ頬。

ソツと紅い血文字の紙を畳に置くと、私に返すままに大婆様は少し希望に満ちた目で私を見つめた。

「良い知らせじゃ……」

「はい？」

「暗き者達は全てを取ろうと考えておらんかったようじゃ。その土地と信仰と人魂、それらを手に入れば、残りは要らんかったとい

「うわけじゃ」

「……？」

「見てみなさい。人を殺すという文がいくつも並んでおろう。じゃが、人を生む、生かすと言った文章はないんじゃないよ」

「だけど私には良く分からず、紙を手に取りながら、私は血文字に首をかしげていた。」

「と、眠たそうに欠伸をしながら、犬のお師匠は私を見上げ、疑問符を浮かべる私に助け船を出してくれた。」

「『神』は自然の体現者だ。命を生み、生かし、そして安らかな死へと導く。命が紡ぐ長い螺旋をずっと見守っている存在だ。」

「だが奴らが奪ってお前に付きつけた『神』の存在は、死を司る半身しかない」

「あ……」

「奴らはおそらく『神』を生ける『神』と死せる『神』とに引き裂き、半身たる死せる『神』を喰らおうとしているのだろつ。」

「六月以前の文章がないのが良い証拠じゃて」

「大婆様から聞いたことがある。神は生と死の二つの面を司る尊き存在である、命を停滞させないように循環させ、世界を生かす様に命の川の流れを作っていると。」

「坊主。お前には既に呪いが掛けられている。おそらくこの呪いは暗き者達が喰らった『神』の魂じゃろ。」

「その力を『神』の元に返さねばならない」

「はいっ……」

「坊主。引き裂かれた半身を探し出さない。そして『神』を蘇らせ奴らを山の向こうへと追い払うのじゃ。」

「おそらく、お前の依頼が達成できる道はこれしかないろつ」

「はいっ……」

「私に新しい目標ができた。私自身に掛けられた呪いを剥がし、大島由々子との契約を履行するために、『神』を探し出すと言う目標が。」

「……のう、婆様」

と、犬の師匠は口をすばめ、首をもたげては大婆様の方へと鼻をヒクつかせた。

「ワシらで幸一の呪いを解いても良いんじゃないぞ？ そっちの方が何かと捗るじゃろうて」

「お前……坊主がなぜここを尋ねたか、知つての物言いか？」

呆れ切った表情で肩を落とす大婆様に、犬の師匠はペタリと尖った耳を垂らし、ウツと苦い表情を浮かべる。

「坊主は、呪いのあるなしに関係なく、この問題を解くと決めとるのじゃ。大島由々子というクライアントの要望に応えようとな。」

お主がそれでは、坊主が自立した意味がなかるうて」

「ぐ、ぐぬぬ……」

「何がぐぬぬじゃ。ちつとは坊主の立場というものを理解してから口を開かんかバカ弟子が」

「……弟子に甘くて何が悪いんじゃないや……ふんだ……」

しよぼんとした感じで師匠は尻尾を丸めて拗ねたように体も丸めて蹲る。

大婆様は呆れたようにため息を漏らすと、火かき棒を囲炉裏の端に置き、徐に胸元に指を差し込んだ。

そして取り出したるは、ほっそりとした白い和紙を指で丸めて糸の様な感じにしたもの。

「手を出しなさい」

私は言われるままに、そっと手を差し出すと、大婆様は細く丸めた和紙を指輪のように私の中指に結って嵌めた。

ジンワリと感じる熱。

嵌めた途端、指先からの暖かさが腕を伝って全身を流れていくような感覚に、私は目を見開いた。

「単なるお呪いじゃよ。……お前が笑顔で帰ってこられるようにの」

「……大婆様」

「死ぬなよ、幸一……」

「……ありがとうございます。僕は必ず帰ってきます」

「崩天の呪術の後継ぎが偏屈な老犬一匹だけでは困る。お前には、わしらを継ぐ立派な呪術師になつてもらわねば……」

その言葉に、ギクリとしたのか御師匠のまるめた背中がビクンと痙攣して、更に体を丸めてしまう。

私は手を下ろすと、お師匠の頭に手を伸ばして、あやす様に何度も撫でる事にした。

撫でるたびに耳が動いて、お師匠はやっぱりお師匠だなと感じた。

「……幸一い。ワシ甘いかのぉ」

「それがお師匠の魅力ですよ……僕は何かを持っていけばいいですかね」

「ワシもついていきたいのぉ……むう、油を持って行け。ペットボトル三本分がちょうどええじゃろ……」

パタパタとふわふわの尻尾で床を掃除しながら、お師匠はまだ少し拗ねた感じで私にアドバイスをくれる。

「獣は概して火を恐れる。何より火はお前に力を与える。

油を火を喚ぶ為の呼び水だ。種火とセットで持っていきなさい。

炎は呪術の基本だ」

「マツチとライターと油三本ですね。わかりました」

「いざとなれば、口に灯油含んで、種火とセットで炎を吐いてしまえッ。」

して、婆様は何を持っていけばいいと思う？」

大婆様はニツコリと微笑んだまま、囲炉裏の火を軽く火かき棒でなぞりながら、目を閉じて囁く。

「獣は血の跡をたどって獲物を追いかける。深く、どこまでも追いかけて獲物を捕まえようとする」

パチリと囲炉裏にくべた木炭が爆ぜて、火の粉が舞い上がる。

「だが、それは時に仇になる。人を辞めた者達は自らを超越者だと信奉するが、実際は夜に身を捧げた従者に過ぎない。

血を拭うものを持ちなさい。それは必ずお前を助ける。彼らを惑

わせるものを持ちなさい。音と光は彼らの五感を鈍らせる」

「……はいっ。わかりました」

「今日はもう遅い。夜が降りてきては外を出歩くのも怖かるう、坊や」

と、お師匠は跳ねあがるように起き上がると、私の背中に飛びかかるようにのしかかってきた。

結構バカにできない重さなわけで、頭の上に顎を置かれながら、お師匠の荒い鼻息に私は顔をしかめた。

「お、お師匠。重いつす……」

「よしっ、婆様っ、今日は幸一をここに泊らせるぞ、異論はないなっ」

「うへえ、酒盛りですか……」

「おうよ、今日は呑もうではないか。お前が二年間どんな仕事をしていたのか聞きたくて仕様がないうぞっ」

そう言いながらじゃれつくお師匠。

ゴンゴンと顎で頭を叩かれ、私は立たされると、お師匠に袖を引っ張られて茶室を後にした。

「お師匠……酒癖悪いんですからあんまり無茶しないでくださいね」

「何を言っつ、お前こそ先に酔いつぶれるなんて真似はするなよ！」

「うっつ……努力します」

明日は、おそらく村の方へと足を運ぶだろう。

そんな私をお師匠は気前良く見送ってくれているようで、私は飲みたくないような、嬉しいような複雑な気持ちで庭の隅の酒蔵まで歩いていた。

ささめく竹林の向こうで、半分の月が私を見下ろしている。

今日だけは、お師匠と大婆様と一緒にこの静けさに身を浸りたいなと、私はしみじみと思いつつ、お師匠のわがままに付き合っただった。

四話目

結果として、彼女の故郷の居場所を細かい所んで調べるのに二日もかかってしまった。

といつても、大婆様の御言葉を借りて、場所をようやく知ることができたのだが。

まったく……それで二年もよう探偵なんぞ名乗れたもんじゃ、すいません……。

まあ、そこがお前の可愛い所じゃがな
はい？

忘れい。ババアの戯言じゃよ……。

そして三日後、私はお師匠と大婆様に見送られて、事務所を出て長野県行きのローカル電車へと飛び乗った。

都市部を走る列車はさすがに最初は一杯だったが、都市近郊から田舎へと近づくにつれて人気もなくなってきた、私はリュックを両手に抱えながら、前後に向かい合わせになったシートに座った。

周りには既に人は少なくて、私は嬉しくなつてリュックを脇に置いて二人掛けのシートを一人で占拠する。

ほんの少しのぜいたくに、私は頬を綻ばせつつ、ポケットに手を伸ばした。

取り出すのは、大島由々子さんから貰った紙。

いいか、幸一。お前が抑えておくべき事柄は二つある。

「よつと」

電車の窓を開けながら、ムシツとした初夏の風が吹き込んでくるのがわかる。

手に持った紙が夏の風に揺れる。

仄かに稲穂と青草、そして山の匂いが鼻をつき、徐々にトンネルが迫ってくるのを見つめながら、私は生温かい風に目を細めた。そして紙の内容を見つめ、お師匠の言葉を思い出す

神の半身は既に奴らに喰われている。もう半身は、隠れているか殺されているだろう。

刹那、日の光が遮られ、風の足音がけたたましく耳元を掠める。トンネル内の特有の薄暗さが車内に広がり、私は目を細めそれでも生温かい風に揺れる紙を見つめる。

一枚目の、大島由々子から貰った紙は暗く、それでも滲んだ言葉ははっきりと見えた。

文字が闇に紅く浮き上がり、風に揺れる草穂のように靡いて見える。

まるで生き物のようだ

しかし言葉は生きている、古く捨てられ、言葉は失われてしまったが、それでも言葉は必ずかの地にて生きているはずだ。

暗闇が晴れ、トンネルの向こうから零れる光に、私は顔を上げると、眩さに目を細めつつ零れる風に頬を当てた。

そしてトンネルを抜け、強くなる日の光。

私は眩さに思わず目をつむる

言葉は肉であり、神の肉とは即ち自然そのもの。自然現象となっているものもあれば、普通に言葉になっているものもある。

人もまた自然……ですね。

共生、共存。……久しく人の世界では忘れられてしまったがな。

はい。

12の『言葉』を探せ、かの地にて改めて言霊を吹きこみ、呪い、かの地に眠る神を降ろすのだ。

後六つでは？

それは偽言だ。本当の『言葉』はかの地にて、今も眠っている。

るはずだ、その言葉を見つけ次第、聖地を探せ。

言霊を吹きこむ場所、ですね。

いい子だ……神が眠る地を目指し、聖地にて神の『言葉』を並べよ。神は祈りに応える。

わかりました。

本来ならその地を知る人物も、言葉に魂を吹き込む役も神事の巫女であるのだろうが、おそらく生きてはいまい。

もしかしたら……。

お前の依頼者がそれなのかしんな。

由々子さん……。

呪術の一族として、託された呪い、かの地にて見事果たしてみせよ、幸一。

はいっ、お師匠。

ワシも行きたいのおおおおお！

お師匠……。

行きたいおおおお、婆様ああああ！

光に目が慣れていく。

ゴンツと最後に拳骨を喰らって気絶をするお師匠の事を思い返し、不意に笑い声が零れて、私は顔を伏せた。

そして紙の中に書かれた文章を目に焼き付けていながら、またトンネルの暗闇が電車を飲み込んでいく。

暗がりの中に紅く映し出された血文字、そして黒く塗られた紙に、私は眉をひそめ顎に手を当て考える。

偽言、お師匠はそう言った。

おそらく、この六つの言葉に祈りを込めても、おそらく引き裂かれた神はその姿を現さない。

なら、この文章は何か。

（祭事で使うと大島さんは言っていた。時の流れの中で言葉は変わっていったのだろう。）

普通に聞いても真言は見つからない。

或いは、言葉としての形は失われているのだろうか　　)

言葉は、おそらく村の人達が儀式の中で使われている言葉で、それらはかつて神の言葉とされ、儀式の中で忠実に行われてきた。

そしておそらく、それは向こうの村でも行われるのだろうか。

それが、私に科された呪い

(文章に書かれたのは、五人。そして新しい一人　いや、最初に配置されているのは六人か)

『最初の一人』は目を覚ましている。

おそらくこの人がこの紙に載っていない、六月以前に眠っているか、死んでいるかの一人であっているのだろう。

なら最初の五人が死に、新たな一人が死んだ時点で『最初の一人』が蘇る。

そして、『神』が蘇る

蘇る？誰？

暗闇はどこまでも広がり、電車を飲み込んでいき、私は薄闇の中、ひたすら頭の中で思索を巡らせていた。

(……人が蘇るってどういう事だろうか。本当に蘇るのだろうか) ガタンガタンと列車が線路を走る音が窓の向こうから、トンネルに反響してやけにけたたましく聞こえてくるのがわかる。

(……人が死ぬのは自然の摂理、蘇るのは人の摂理。……『人』がいる。誰かが人を蘇らせようとしている。誰？

最初の人？生き返る方法は？それとも……死ねない)

サラリと背中を撫でる悪寒がした。

(……暗き者)

ゴオオオオオオッ

トンネルを抜けて騒音が窓の向こうへと飛び出していく。

日の光が三度窓から零れ、私は眩さに顔を上げ周りを見渡した。流れていく田園風景。

山に囲まれた田舎の景色は徐々に深まっていき、鬱蒼とした緑はまるで未開の地のような様相を呈していた。

そおつと表面を撫でるように、田んぼの上を風が波紋を広げ走り抜けていく。

窓から零れる風に手に持った紙がハタハタと揺れ、私は戸惑いを覚えながらも帽子を押さえまた紙に目を配った。

（眩しさが柔らかい……）

光に気配が薄れていく。

私はホツとため息をつきながらも、紅い紙に浮かんだ七人の物語の一節について視線を走らせた。

（こっちは七人。だけど死んだのは六人で……違う物語の一節？）
こっちの黒い紙には、見てとれるほど、力が込められているのがわかった。呪術師のはしくれの私ですら、この紙には『怨念』がこもっている。

これはおそらく神事の勅　儀式で使う言葉の一節だろう。

（多分同じ物語　生き残っているのが『新しい一人』だろうか…

…新しい、外から入ってきた人間が、生贄になると言う事）

人を喰らおうとする、強い呪い。

七人もの人間をこの物語に引き込み、言葉通りに殺すであろう呪いの力。

神の力

（……引き裂かれた、半身……）

この手紙は、おそらく大婆様のいう暗き者達の書いたものだろう。神様を喰ってしまっただけという。

（神様を食べる、死ねない　人魚伝説を思い出すなあ……）

神は自然の体現者。

お師匠がいった言葉を僅かに頭の中でリフレインさせた。おそらく神が死ねば自然の流れが滞るのだろう。

死ねない、死んでも生き返る

神の死した地は、おそらく私の目的地は、さながら不死の村にでもなっているのだろうか。

（天の理が消える……『人』が目覚めます）

私は紙を畳みポケットに挟じりこむと、小さなため息と共にまた周囲を見渡した。

じつと見つめる熱っぽい視線。

「……え？」

誰かが私を見ている。

だけどそれは嫌な気配ではなく　私は眩さに滲む視界を擦り、周囲を見渡した。

そして、向かいの席に目を向けると、女の子が座っていた。

真っ白な長い髪。

透き通るほどの綺麗な肌。

日の光を火照った頬に当て、小さな手にススキを握りしめ、なんだか眠たそうにジトリとした目つきで女の子は私を見つめている。

その目は黒く、吸い込まれそうだった。

日はまだ傾いておらず、長い時間眠っていたわけでもなく、いつこの子が入ってきたのか、私はまるで気付かなかった。

さすがに戸惑いが隠せず、私はぎこちない表情を浮かべ、そろそろリュックを脇に置き、白髪の少女から視線を外す。

それでも、女の子は視線を外さず、私を見つめている

「……えと……なんででしょうか？」

さすがに気まずさが隠せず、私が顔を上げ首を傾げると、女の子は無表情のまま俯いて無言で首を振った。

用はないらしい。

ぼんやりしている間に、乗客が別の車両からやってきたのだろう。さすがに椅子を占拠しすぎたのかなと思い、私は周りを見渡せば、やはり他の席には人の気配はなかった。

「あ……」

その代わり、『影』があった。

日の光に霞みながら、つり革につかまる人の形をした黒い影がいくつもずらりと横一列に並んでいるのが見える。

椅子には綺麗に老婆の輪郭を模した影が、ペラペラのまま俯き加

減で肩を寄せ合い座っていて、先頭車両の先には、影人が帽子と制服を被って、窓の向こうに指差しながら列車を運行しているのが見えた。

トトトトツ

甲高い子どもの笑い声。

軋む木の床を踏みながら、影の群れの間を縫うように、姿なく黒い足跡がいくつも浮かんだでは車両の奥へと消えていく。

流れていく景色、吹きこむ夏の風。

列車は揺れながら田んぼを縫うように線路を走っていき、線路は山間の向こうへと吸い込まれる。

まるで時を遡るように、田舎の景色へと

「……」

ひたりと手の平に這う冷たい濡れた感触

周囲の変化に驚きに目を丸くする私に、白髪少女が近づいてきて、私に手を重ねて何かを握らせてきた。

手の平を開けば、そこには竹の箸。

更に驚いてにじり寄る少女の顔を覗きこめば、口元には小さなご飯粒が一つ。

「……ご飯でも食べたの？」

ジトリと私を見つめる白い瞳。

少女は無言のまま首を振ると、やがて踵を返してトトトツとペラペラな人の影を縫うように通路へと飛び出した

日に透き通るような白い肌は、そのまま次の車両へと消えていき、私は首を傾げながらも、渡された竹の箸を握りしめる。

周囲を見渡せば、人の輪郭を帯びた影はどこをみるわけでもなく、窓に向き合い電車で揺られるままに立ち尽くしている。

（……天の理が千切れる、か）

始まったのだらう。

私はぼんやりと、まるで早送りされるビデオのように高速で日が落ちていく空を見上げていた。

何度目かのトンネルを過ぎて、日が夕焼け色に滲んでくる中、山と山の峡谷を過ぎては、まるで大地が抉れたかのような深い谷の間を見下ろし、レンガの橋を横目にトンネルの暗闇に目を細める。

（……次、か）

トンネルを抜けたら、日が落ちるだろう。

おそらくその先に、大島由々子の故郷が待っているのだろう。そして

クシャリ……

拳を固めていて、竹の箸を持っていた手の中に紙の感触があった。手の平の中に感じる違和感に、首を傾げ、私は胸元に握りしめた手の平を開いた。

覗きこめば、小さく丸められた紙屑。

いつから握られていたのだろうか、私は怪訝に思いながらも丸められた紙を広げ、リュックからペンライトを取り出し光をかざす。

薄闇の中、光が確かに車内に零れ、周囲の影の人達を透過していく。

又チャリ……

水音を響かせ、光に引き寄せられ、歩み寄ってくる無数の人の影を横目に私は紙を覗き込む。

「あ……」

『言葉』が描かれていた。

人の言葉ではない、文字すら描かれていない小さな白紙の紙切れ。だけどそこには熱を感じる

「……」

グチャリ……

私の身体の周りに、滑った手形がいくつも浮かび、無数の人の影が手をかざす私の光を奪おうと覆いかぶさってくる。

小さなペンライトの明りを切り、リュックにしまうと、私は握りしめていた紙きれをギュツと両手に抱え込む。

息を吐きだし、目を閉じる。

覚えた『言葉』を頭に繰り返す

「……木漏れ日を受け、夜を明ける、露よ眼の穂より落ちて土を濡らす、光ありて命ありて魂ありて……栄えよ」

手の中から零れる光。

身体を押し潰すような粘っこい暗闇を照らす仄かな輝きが瞼を貫き、私は眩さに目を開け恐る恐る両手を開いて中を覗きこんだ。

そこには、小さな光がまるで蛍のようにふわふわと手の中に浮かんでいた。

漂う光は、滴のように辺りに光の粉を撒きながら暗闇を照らす。

光の粉は暗闇に無数の輝きを作り、私の周囲を覆っていた人の影は、光を透過することができず、光の奔流の中に溶けていく。

バシャリ……

光の中に輪郭が解けていき、水の跳ねるような音が床に響く

「……三月……命の芽吹き之光……『12の言葉』の一つ」

ガタンガタン

トンネルが過ぎ、夕焼けが床に私の影を作る中、私はソツと両手に掲げていた光の滴を手の中に包んだ。

光が私の中へと吸い込まれ、身体が中心が熱を持つのを感じる。

誰かに抱きしめられるように暖かい

「……神よ」

手の平を開けば、そこには焦げたような跡。

私は顔を上げると、神の言葉をくれた白髪の少女を思い出し、感謝に胸を膨らませた。

「ありがとう……」

私はグツと手を握りしめ、窓の向こうを覗きこむ。

列車は山を抜け、平地へと辿り、夕焼けに染まった田園風景を左右に覗かせながら線路走っていく。

どこまでも広がる田園風景の向こうには、夕焼けに照らされながら、いくつも連なる大山を背にして灯る人の明りが見えた。

おそらく集落だろう。

だけど不思議な事に、その周り、いや線路の左右に広がる田んぼ
までも、人の気配が異様なほどに垂れ流れていた。

集落の中で、火の明りが空を覆い始める黄昏時の薄闇を僅かに払
い、細々とした煙が夜空へと伸びているのが見える。

それは確かに人がいる証。

見つめる限り、そこまでは不自然だとは思わない。

だけど田んぼもあぜ道も、周囲の山も木々も、まるで散髪したて
のような仕上がりがだった。

山の木々は切り揃えられ、田は穂先の一つ一つまで丁寧に気を配
っているかのようで、あぜ道は舗装したかのように整えられている。
どこまでも、人の手が加わっていた。

自然が、覆い隠されている。

気持ち悪いくらいに

「……」

あそこが、おそらく私の目的地だろう。

私はリュックを手にとると、貰った竹の箸を適当なティッシュに
包んでリュックのポケットに突っ込んだ。

多分、この先も何かを口にする機会が多いだろう。

列車の速度が遅くなってきたおり、降りる準備をしながらふと窓
から顔を覗かせれば、緋色と藍色の景色の狭間にぽつんと駅があっ
た。

改札と街灯とベンチと雨よけの屋根があるだけの無人駅。

人の気配なんて全くなくて、カチカチと切れかけの街灯が三つ、
寂しげに点滅しているだけ。

「……」

シューウウウウ……

どこからか蒸気の音が聞こえてきて、身体が前に引っ張られ、列
車が止まるのがわかる。

窓の向こうから立ち上る、夜の街灯に照らされた蒸気。

程なくして扉がひとりでに開き、私は誰もいない車内を見渡した。

がら、一人列車から足を下ろした。

そして後ろを振り返れば、私は立ち上る煙突の煙に目を丸くする。

「……電車……乗ったよね」

古臭いまでの黒いフォーム。

そそり立つ煙突。そして窓ガラスのない扉。

見上げながら、思わず冷や汗が垂れた。

ガタンガタン……

立ち上る蒸気、すぐ後ろには大量の石炭を積み、ゆっくりと黒い汽車が古臭い車両を引っ張って線路を走り始める。

緋色の藍色の空の狭間をかくぐり、長い線路の上を走っていく。線路は田園風景の中へと潜っていく。

汽車も同じく田園風景へと潜り、黄昏の闇へと溶けていく。

ガタンガタン……

けたたましい走行音だけが、誰もいない駅に残響し、遠のいていく。

胸をよぎるのは、微かな孤独。

足が軽くすくみそうになりながらも、私は少し自分の胸に手をあて、夜の空気を少し吸い込み、目を閉じた。

カサリと指を撫でる紙の感触。

大婆様が結ってくれた呪いの紙輪から、仄かな暖かさが身体全体に広がってきて、心の動揺が少し晴れていく。

必ず帰ります、お師匠、大婆様。

目を開き、コートを翻して踵を返すと、私は広がる夜の闇に眼を細めながら、点滅する街灯の下へと足を運んだ。

そこには、駅名を示しているはずの看板。

経年劣化により看板にこびりついた錆は、しかし駅の名前も前後の駅の名前すらも飲み込み暗く隠していた。

まるで、ここがどこなのか知られたくないのかと

「……」

「おい、あんた」

野太い声が私の背中を呼ぶ。

コートを翻しながら帽子を脱ぐと、怪訝に眉をひそめながら私は後ろを振り返った。

点滅する街灯の向こう、暗闇から顔を出したのは、二つの影。

どちらも『人』だった

「あなたは……」

「島崎昇だ。……水樹幸一だな」

ほっとした表情と私を疑う険しい表情が入り混じった複雑な顔を見せる島崎さんに、私は苦笑いを浮かべた。

そしてその隣で、同じく険しい顔の中にほっとした表情を滲ませる瘦躯の男に、私は首を傾げた。

前の人と違う

「荒木で俺の部下だ。……それよりここはどこだ？」

大島由々子さんの故郷だとは思う。

「うーん……さあ……」

ただ位置関係という意味ではどこなのか分からず、私は踵を返し険しい表情の島崎さんを背に街灯から足を引いた。

暗闇がすぐに私の周りに広がっていき、目が闇に慣れ、私は夜の空気を吸い込み空を見上げる。

星が瞬いている。

北を向けば北極星が見えて、大きな星がいくつも点々と夜天を彩っていて、とても綺麗で、私はハッと目を丸くした。

指差して、大きな一等星を中心に大体の星の数と位置を数える。

そして 少しゾツとした。

（……さそり座だ。あれはペルセウス座）

八月の星空だった。

大婆様からよく占星術のいろはについて語られた事もあるので、基本的な月ごとの星空は良く見せてもらっていた。

だからこそ、この星空は、明らかにおかしい。

（……旧暦はおおよそ七月……時間が、進んでいる。異様なくらい

に)

天の理が千切れようとしている。

(時の流れが速い……この世界は別の時間が流れていて、空間は閉じられていて、作られているようにみえる。

それにこの加速具合……多分……。

ひどいな……これが彼女の故郷か)

そして、これを作ったやつらがいる。

(……行こう。何が起きているのか調べないと)

私は夜空を見上げる視線を落とし、僅かに首をもたげる焦りに身を任せ駅を後にしようとした。

「おいっ、水樹幸一！」

「失礼、僕は用事がありますので。他の皆さんが来たら、僕の所に来るように言っておいてください！」

「な、何の話だ？……おいっ」

「僕は、この村を救わないといけませんっ」

「はあ!？」

「田島さんに伝えてください、人を襲う事のないようにと！」

「え……?」

戸惑う島崎さんを背に、私は暗闇広がるあぜ道へと一步を踏み出す。

夜の風はとても気持ち良く、田の穂を撫でれば寄せるさざ波のように穂が一斉に頭を垂れて私の背中を押す。

たなびくコートを押さえ帽子をきつく抑え、私は夜の空気を吐き出し口をきつく引き締め、遠く、暗い山に囲われた小さな村落を指す。

大島由々子の故郷、上梨村へ。

五話目

そう言つて、水樹幸一は名も知らぬ駅を離れて、街灯一つない、薄暗い田んぼのあぜ道へと消えていった。

私は茫然と街灯の下に立ち尽くすだけ。

何を言っているのかわからなかった。

そもそも私は、あの男を追いかけて同じ電車に乗ったはずだった。なのに少し眠気が頭をよぎり、すぐに目を覚ませば、この誰もいない駅の切れかけの灯の下に、部下の荒木と共に立ちつくしていた。これは夢ではないのか。

だが何度自分の頬を叩いても、私は夢から覚めることはなかった。これは現実なのだろうか……。

身体がべとべととする。

露出した腕や首筋を伝うのは、黒い汁。

じつとりと何かに掴まれた様な跡が私の身体に浮かぶ。

まるで腐りかけた魚を体中に塗りたくられたかのような異臭が、汁を塗りたくられた私の身体から立ち上り、鼻を曲げる。

意識が飛びそうなほどの匂いに、私は顔をしかめつつも、街灯の向こうの暗闇を見つめる。

夜の闇の中、どこまでも広がる田んぼの景色。おおよそ百ヘクタールはくだらないであろう広大な田園地帯が広がっていた。

振り返れば、線路の向こうに更に広い田園が地平線を作っている。

おかしい景色だった。

ぞつとするほどの違和感があった。

遠くの村落は昔ながらの田舎風景で、これだけ広い田畑を維持できるほどの人数も機材もあるようには到底見えなかった。

それに山は田園の景色を囲み遠くに見えるのに圧迫感がすさまじい。まるで一つの巨大な牢獄に投げ込まれたかのような気分だった。線路だっておかしい。

振り返ればそこには苔むした線路がどこまでも続き、山の向こう、いや田んぼ奥へと隠れてしまっている。

あれは……どこへ続いているんだ。

この先には、何があるのか。

ここは、どこなのか……。

異様だ。何もかもが、私の常識を超えている。

ここは

「……荒木。行くぞ」

頭にこびりついて離れない焦りを振り払い、私は息を何度も飲み込み後ろに立つ荒木を呼ぼうと後ろを振り返った。

「はい、警部」

暗闇に立つ、影が一つ。

「……」

何もない線路の上、誰かが我々を見上げていた。

まるで影の様に、ペラペラな姿の大男。

暗くて輪郭がぼんやりとしていて見えない、それなのに、はつきりと見開いた二つの目と口元だけが闇の中に白く映し出される。

ひらひらと伸びる細長い両の腕が、ヒタリと駅のホームの端をつかみ、前のめりに身体を傾け滑るように上ってくる。

口から血が滴る。

嗤っている。

暗闇の中で、誰かが笑っている

「警部、汗が……」

「行こう。泊るところを見つけないとな」

そう呟きながら、足が僅かにすくみ、私は何かに震える自分自身に喝をいれるように拳をきつく握りしめた。

何も見えない、何も見えていない。

何も

「あ、警部っ……」

突き刺さる背中中の視線に追われながら、私は寂れた無人駅を後にして、遠くに見える村を目指してあの男と同じ道をたどることにした。

ジャリ……ジャリ……

夜風に潜む、濡れた土を踏む小さな足音。

遠くから、私に追いつこうと近づいてくる、大股に歩き手をブンブンと振る音が聞こえる、ニヤついた荒い息遣いを掠める。

手を振る音がどんどん大きくなる。

砂利を蹴る音が近くなる、どんどん近づいてくる。

息遣いが肩越しに聞こえてくる。

違う。

違う！

これは……これは部下の足音だっ。

これは

警部……

低く、呻くような囁き。

耳に絡みつき、ブンブンと大きく手を振る音が止まる。

私の手が掴まれる

助け……

「はぁ……はぁ……！」

気がつけば、私は暗闇の中を、逃げるように駆けだしていった。

部下の事は、すっかりと忘れていた。

二の腕には、血のりがこびりついたように、真っ赤な手形が浮かんで私の腕をつかんで離そうとしていなかった。

ジトリと血が滴る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311ba/>

再掲：闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

2011年12月31日22時01分発行